

# 白選五十一首



## 柳 宣宏

やなぎ・のぶひろ 1953年、神奈川県生まれ。早稲田大学第一文学部卒。'76年に窪田章一郎に師事、「まひる野」入会。'90年同人誌「ノペンタ」創刊に参加、'01年終刊。現在「まひる野」編集委員。

歌へ畳一畳の全身だから 雲混じりの夜の歌声

いつばいに腕を広げて射られるむ絵本の弁慶をしぼし淋しむ

哺乳壘吸ひつつ視点を逸らさざる瞳の中のわれも笑はず

生活の楽ならざると思ふときわが夢をいつも河馬が過ぎゆく

とんぼには名がありません、太い尾に海のひかりを曳いて飛びます

見栄もなく外聞もなき一匹の蠅にも深き断念がある

いつまでも靴を磨いてゐるやうなときには誰も声をかけるな

あかときの影を畳に曳いてゐる香炉がひとつびくりともしない

海原を飛んでゐるのはかもめですどこまで行つてもまる見えである

足もとからばつたが跳んだ軽がるとなにももたずにばつたが跳んだ

どんぐりの実が落ちてゐるどのやうな花だつたのかどんぐりの花

【与楽】以前

【与楽】

西行を卒業論文のテーマに選んだのが、歌との出会い。

私の住んでいる町（神奈川県大磯町）に鴨立庵つらぬちあんという、江戸時代から続く由緒正しい俳諧道場がある。「ころなき身にもあはれは知られけり鴨立つ沢の秋の夕暮」が詠まれた地に建つというのだが、どうも怪しい。道場といつても、今は役場が管理する。茅葺かやぶきの茶室があつて、町の人が利用している。庵主には初代の大淀三千風おおせちみちかぜ以来俳人となる。先代の草間時彦くさまときひこ氏はちつとも偉ぶるところがなく、お会いするのが楽しみだったのに、亡くなられてもうかなわない。

論文主査は、窪田章一郎くぼたあきら先生。御著『西行の研究』以上のことは、いままって言えない。

伸びすぎて倒れたる木と言ふけれど生きられるかぎり生きた木である

名を知らぬ冬の林に鳴く鳥よあなたのこゑは空が聴いてゐる

降り積みて雪はかがやく少年のソプラノのごとし竹の葉の青

走りたる電車の席に目をつむりいましたがた見し白梅を呼ぶ

見くだしても言ふ癖がわれにあり山のすみれを見て思ふこと

ねぢ穴に順繰りにねぢを嵌めこんで仕上がるやうに死んでたまるか

日盛りに街を流るる川のみづ石越ゆるるときに強くかがやく

働いて帰つてきたら塀ごしにふんはり白い芙蓉の花よ

海からの風に吹かれて夏草が初めて「ああつ」と言つたのでした

棒きれにシャツを吊して寝転べば海こそいつも裸ぢやないか

地べたには激しく雨が打ちつづく受け容れるとはかういふことか

てのひらに落葉を掬へばあたたかい落葉に劣るいち日もある

とぼとぼと歩いてゐても背中から月が照らしてゐたのであつた

白雲をあたまに載せて誰もだれもいで湯に浸かる春の夕暮

木洩れ日がまあるく地べたに落ちてゐて草の後ろが光つてゐます

初めての万年筆を買ひくれし思へば父は期待を言はず

銭湯の明るき日差しの洗ひ場に旧日本兵父はやさしき

温飯ぬくめしに豆腐をのせて俺は食ふ父の好みしものひとつぞ

厚手なる葉つばの陰に枇杷の子ら固まり合つてからだを揺らす

すり減りし雨戸が庭にずり落ちて涼しき空に照る秋の月

ただ、その時に曖昧曖昧だったことをはつきりしたいとは思つてきた。自分で歌を詠むようになつて、歌と縁が切れなかつたからだろう。「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」。有名な歌である。まさか二度までも陸奥へ旅するとは思つていなかったというのだが、西行はどういう心で「命なりけり」と歌つたのだろうか。

私の心臓、私の呼吸というが、私は心臓を自ら動かしたことも一瞬でも止めたこともない。呼吸だつて自分で始めた記憶がない。心臓一つ自由にならない私の命つて何なのだろう。命は自分の持物ではないよ、そんな自覚が西行の歌を深いものにしていてと思う。自分の小ささ、自然や宇宙といったものの働きの大きさ、そしてその自覚。そのような経験無しにこの歌は生まれなかつたらう。そして、そう考える私なしには私は私の歌を詠むことができなかった。それまでの二十余年の歌は習作にすぎない。

夏でも座卓代わりの電気炬燵こたつの上で、原稿を書いたり本を読んだりする。折り畳めるので押入れに片付けるのだが、その脇に茶色い革張りのアタッシュケースがある。中に万年筆で清書したおよそ四百首の歌の原稿が入っている。歌集にしようと思つてやめた。この五十首選冒頭四首は、その中であつたと思う。

道にしてその部屋は見ゆ媼ひとり蒲団の上にうどんを噉る

鳥になる修行を積みしラマ僧が餅につかへて死ぬと伝え来

どんぐりがどんぐりの木となることをつまらぬことだと思つてゐないか

草の上に日を浴びながらさびしいのは自分のことだけ考へるから

階段を娘が下りてゆくまでを部屋にゐて聞くやさしき音ぞ

サラリーは家族に運んでくるものを惚けて母はなにも望まず

悠々と雲は流るる冬の海あ悠悠々と人に遅れよ

暗澹たる日の暮れどきは雑巾をきつく絞つて階段を拭く

干瓢の稀荷の寿司に巻きたるを噛み切れぬごとき悲哀ぞ来たる

楠の木も櫛も歩き回りません自分を信じてゐるのであります

この山があたためてゐた種ならむ道にすみれの寄り合ひて咲く

朝起きて楽しきものはひよどりがトタンの屋根に跳ねてゐる音

川べりにたんぽぽのはなひらきそむ教はることぢや、あーりませんよ

かなしみがたとへば俺にあるとして雨に打たるる花うつくしき

こんなにも山のさくらが美しい去年の春にひとたび死んで

若い木に若葉が生えるわけぢやない死ぬまで若葉は生えてくるんだ

草の上<sup>へ</sup>に露が光つた真つ暗なところの中で露が光つた

岩の根にすみれの花が咲いてゐる大きな岩がやさしく見える

死んでから生まれ変はつちや遅すぎる枝に若葉が噴き出してゐる

「与茶」以後